拒絶の感じやすさと被拒絶感の関連性

2021HP010　服部透也

問題と目的

1996 年に Downey & Feldman によって，拒絶感受性（rejection sensitivity),「拒絶の手掛かりに対して，不安げに予測し，素早く知覚し，強烈に，かつ否定的に反応する傾向」が提唱され，日本では，本多・桜井（2000）によって日本語版拒否に対する感受性測定尺度が作成された。しかし，対象間での項目内容の等質性を保ちつつ，従来よりも効率的な尺度を考案する必要があるとされていた。そこで本研究では，対象間で項目内容の等質性を保ちつつ，従来の拒絶感受性測定尺度とは異なる測定方法を考案し，拒絶の感じやすさが「自分は拒絶されやすい」という自己概念を確証しようとすることによって高められるという仮説を検証することを目的とする。

方法

大学生 153 名に Google Forms による調査の協力を求めた。このうち性別を回答していない 2 名を除く 151 名（男性 65 名，女性 86 名）を分析の対象とした。平均年齢は 21.03 歳（*SD*=1.04）であった。質問紙は，(1)フェイスシート，(2)他者による曖昧な反応に対する拒絶認知傾向尺度，(3)公的自意識尺度，(4)孤独感類型判別尺度，(5)被拒絶感尺度，(6)日本語版拒否に対する感受性尺度から構成された。なお，新たに自作した他者による曖昧な反応に対する拒絶認知傾向尺度は，他者を一般的な他者，親しい友人，恋人の 3 場面を想定させた。

結果と考察

他者による曖昧な反応に対する拒絶認知に関する項目について，一般的な他者，親しい友人，恋人のそれぞれ 10 項目を対象に因子分析を行った結果 2 因子が抽出されたが，項目の意味合い，構成概念妥当性の観点から最終的に各 5 項目の計 15 項目の 1 因子解を採用した。次に，相関の確認された拒絶認知傾向，公的自意識，孤独感の対他的次元，被拒絶感について，構造方程式モデリングを用いて拒絶認知傾向過程のモデルの検討を行ったところ，仮説は支持されず，拒絶されやすいという自己概念を持っているために，周囲の目を気にするようになり，他者の曖昧な反応に拒絶を感じてしまうという可能性が示唆された。

大学生のテレビ離れについての検討―大学生のタイパ志向に着目して－

問題・目的

近年、特に若者世代においてテレビ離れの傾向にあるにあることが指摘されている。このテレビ離れの大きな要因としてメディアの多様化とインターネットの普及を挙げ、テレビ離れについて論じている先行研究は多くみられる。しかし、若者のテレビ離れについて論じるにあたって、テレビのリアルタイム視聴を前提とした編成の考え方が実際の生活時間と合っておらず(保高・船越, 2023)、テレビ視聴に対して時間的制約を感じうる点に焦点を当てる必要があるのではないかと考えた。そこで、本研究では若者のテレビ離れの要因の１つとしてタイパ志向が挙げられるという仮説を立て、テレビ離れと、本論文内で費やす時間に対する時間的拘束感と満足度の程度と定義する「タイパ」志向の関連性を見ることを第１の目的とした。さらにこれに付随して、どのようなテレビ番組であればリアルタイム視聴をしたいと思うかについて検討することを第２の目的とした。

方法

大学生の男女 106 名(男性 19 名，女性 85 名，その他２名)に、Google フォームによる質問紙調査を行い、分析を行った。質問項目として、テレビの視聴頻度・テレビを見る/見ない理由・推しの有無・テレビ視聴の際に不快な気持ちになった経験の有無・テレビ視聴の際に時間的切迫感を感じた経験の有無について回答を求めた。テレビ離れにおけるタイパ志向の関連性については時間管理尺度(井邑他, 2016)を用いて測定した。なお、本論文ではタイパを「費やす時間に対する時間的拘束感と満足度の程度」と定義した。

結果・考察

テレビ番組の視聴頻度と推しの有無とそれに伴いテレビ番組を見るか否かについて関連性を検討するために対応分析を行ったところ、推しの有無がテレビ視聴に強く関連していることが分かった。そこでリアルタイム視聴と推しの有無に着目して推しがいる人の中で、リアルタイムでテレビを“見る”群と“見ない”群の２群に分け、時間管理尺度の３因子下位尺度得点の差異を検討した結果、「時間の見積もり」の下位尺度得点においてで有意な差が認められた。その要因として、リアルタイム視聴に対して時間的拘束感を感じるというタイパ志向が挙げられ、結果として大学生のテレビ離れの要因に大学生のタイパ志向の高さが挙げられることが示された。

持続的な友人関係における冗談関係の認知と親密さとの関連

――いじり関係志向を考慮して――

問題と目的

日常的なコミュニケーションで用いられる冗談には多様な表現や動機があり、特定の相手との関係性に応じて使われる（葉山・櫻井, 2008a; 塚脇他, 2009; 塚脇, 2011）。葉山・櫻井（2008a）は「相手との関係を『真面目なコミュニケーションだけでなく，お互いに冗談を言い合える関係』と認知すること」を意味する冗談関係の認知が、冗談行動を促進することを示し、親友関係で特に高いことを明らかにした。さらに，葉山・櫻井（2010）は，関係初期（3 カ月以内）における冗談関係の認知と親密さとの関連を示した。しかしながら、関係初期以降の友人関係における親密さとの関連は未検討である。本研究では、3 カ月以上持続する友人関係を対象に、冗談関係の認知と親密さとの関連性を明らかにすることを目的とする。さらに、冗談に関連する研究で性差が示唆されること（谷・大坊, 2008; 伊藤, 2012）や、いじり関係志向（小鳥・小平, 2022）という個人特性が影響する可能性を踏まえ、性差や個人特性を考慮した検討を行う。

方法

大学生を対象に Google フォームによる質問紙調査を実施した。回答者は 129 名であった。調査項目として，フェイスシート（性別・年齢・学生），親密度の質問 1 項目，心理的距離の質問 1 項目，心理的重なり（Aron et al., 1992）1 項目，対人的信頼感（酒井, 2005）14 項目，冗談関係の認知（葉山・櫻井, 2010）20 項目，冗談を言う頻度 2 項目，いじり関係志向（小鳥・小平, 2022）15 項目を用いた。なお，フェイスシートといじり関係志向以外の項目は相手として「大学入学後に出会った 3 カ月以上にわたって友人関係が続いている同性の人物」を想定した。

結果と考察

年齢を 76 と回答した 1 名を除外し，128 名（男性 51 名，女性 76 名，回答なし 1 名，平均年齢 19.8 歳, SD = 1.13）を対象に分析を行った。冗談関係の認知の各下位尺度と親密さの指標・冗談を言う頻度について，他の 3 つの下位尺度を統制した偏相関を求めた。相手から冗談を受け入れられるという被受容感と相手に自分の冗談の好みを理解されているという被理解感が親密さと関連を示した。次に，同様にして男女別に偏相関を求めた。その結果，男性は被受容のみが，女性は被受容感と被理解感の両方が親密さの指標と関連を示した。さらに，いじり関係志向の得点によってクラスター分析を行い，得点が低い群（いじり関係否定群），得点が高い群（いじり関係肯定群），得点が平均的な群（いじり関係無関心群）を抽出した。それぞれの群に対して同様に偏相関を求めた結果，3 つの群間で，冗談関係の認知と親密さの指標との関連の様子が異なっていた。以上より，持続的な友人関係においても冗談関係の認知と親密さは関連し，関連の様子は，性別や個人のいじり関係志向によって異なっていることが明らかとなった。

不登校児童生徒の母親に対し，家族の構成員が行うべき支援についての検討

問題と目的

近年，不登校児童生徒数は増加し続けており，小中学校での令和 5 年度の不登校児童生徒数は過去最多の 346482 人であった（文部科学省，2024）。不登校児童生徒は悩みや不安を抱えている場合が多いことが文部科学省（2021）の調査で明らかになっている。

不登校児童生徒の保護者もまた，不安やストレスを抱えており，その実態や対処法に関する研究が数多く行われている。しかし，不登校児童生徒の保護者が抱く心理的な負担に関する研究は，母親を対象としたものが多く，父親を対象とした研究は少ない。この背景には，不登校児童生徒への対応は主に母親が担う場合が多く，対応の中で生じる負担も母親に偏っている現状があると考えられる。

母親の負担軽減のためには，家族による支援が必要であると言えるが，不登校児童生徒の母親に対して家族が行うべき支援に関する研究は未だ不十分である。そこで本研究では，不登校児童生徒の母親を対象に調査を行うことで，不登校児童生徒への対応で感じたことや家族に抱いている感情，家族にどのような支援を求めているのかについて検討することを目的とする。

方法

本研究では，内藤（1993）によって開発された PAC 分析を用いて調査および分析を行った。調査はインタビューで行い，データの分析はクラスター分析（Ward 法）で行った。調査および分析で，PAC 分析支援ツールである PAC-Assist2（土田，2003）を使用した。調査協力者は，わが子の不登校を経験し，その不登校児童生徒に対応した経験のある母親 2 名であった。インタビューでは，不登校児童生徒への対応の中で生じた感情や家族への感情，家族に望む支援や実際に受けた支援，支援が得られた場合や得られなかった場合の感情を尋ね，浮かんだイメージや言葉を記入するよう求めた。

結果と考察

分析の結果，不登校児童生徒に対応する母親に対して家族が行うべき支援は，1 人目の事例では，①母親を受容し，肯定すること，②家族からも不登校児童生徒と関わりを持つこと，③母親の話を聞いてあげること，④母親に普段と変わらない態度で接することであると解釈した。そして 2 人目の事例では，①母親一人に対応させず，家族で協力して対応する姿勢を見せること，②母親自身のことを受け入れること，③対話の時間を持つことであると解釈した。

両者の事例を比較すると，類似点と相違点の両方が見られた。類似点は，①不登校児童生徒への対応の中でネガティブな感情が生じていたこと，②ネガティブな感情は，家族からの支援や協力によって救われていたことであった。相違点は，①子供が現在も不登校か否かによってネガティブな感情に対する自己評価が変わること，②不登校児童生徒への対応を母親一人で行っていたか，家族と協力して行っていたかで，対応の際に生じるネガティブな感情の性質や，家族に対して抱く感情の性質が変わることであった。

大学生の対人ストレス状況における制御困難性の検討
――対人関係状況と対人自己状況の比較――

問題・目的

将来発生する問題に対して，解決を目指して繰り返し考え続ける思考を心配と呼ぶ（Borkovec et al.，1983)。心配は日常的な思考であるが，過度な心配は思考を制御できなくなり，精神に悪影響を及ぼす可能性が指摘されている（黒田他，2015)。大学生が抱える重要な問題としては人間関係の問題が挙げられるだろう（一般社団法人国立大学法人保健管理施設協議会，2015)。人間関係から生じる問題は多様である一方で，そこから生じる心配の制御困難性については，個々に検討されていない。本研究では，人間関係から問題が生じる状況を，関係性を原因とする対人関係状況と，自分自身を原因とする対人自己状況の 2 つに分類し，各状況で思考の制御困難性に至るまでの構造を検討する。

方法

大学生 145 名（男性 57 名，女性 87 名，その他 1 名)に質問紙への回答を求めた。質問紙は(a)ストレス体験の内容，(b)問題焦点型対処方略を問う尺度，(c)内的陳述を問う尺度，(d)思考の制御困難性を問う尺度で構成された。調査協力者に対人関係状況と対人自己状況についてそれぞれ経験がある状況に関して回答を求めた。

結果・考察

対人関係状況と対人自己状況において，思考の制御困難性に有意な差はみられなかった。このことから，2 状況から生じる思考の制御困難性には違いがあるとは言えないことが示された。また，2 状況について共分散構造分析を用いて，思考の制御困難性に至るまでに関連する構成概念を比較した。その結果，対人関係状況では「問題焦点型対処方略」と「未解決感」・「思考の制御困難性」の間を除いたすべての構成概念に関連が見られた。対人自己状況においてはすべての構成概念間に関連がみられた。2 状況において「問題焦点型対処方略」が「考え続ける義務感」,「未解決感」を経て「思考の制御困難性」につながるという構造は同一であったため，2 状況で思考の制御困難性に至るまでの構成概念に違いがあるとはいえないことが示されたといえる。以上から，本研究では対人関係にごとに思考の制御困難性状況に至るモデルとして同一のモデルが想定できるといえるだろう。

化粧入念度と感情状態の関連

問題・目的

化粧は，外見の魅力を向上させるだけでなく，心理的な効果を持つことが報告されている(阿部，2002)。主にスキンケアとメイクアップに化粧を二分し，それぞれの効果として，スキンケアでは安静的な感情を，メイクアップでは肯定的な感情を高めることが明らかであった(平松，2007；佐藤，2020)。しかしながら，私たちが日頃行う化粧では入念さが異なることが考えられるものの，化粧の質の違いがもたらす心理的効果については定かでない。また，化粧に対する意識や化粧行程に性差があることから，女性のみを調査対象とした先行研究が多くみられる。そこで，本研究では性別を問わず調査を実施し，化粧入念度の違いと化粧後の感情状態の関連について明らかにすること，さらに，スキンケアとメイクアップのように大別するのではなく，化粧品目それぞれと感情変化の関連についても探索的に検討することを目的とした。

方法

18 歳から 22 歳までの男女 163 名(男性 59 名，女性 104 名，平均 20.3 歳，*SD*＝1.14)に，Google フォームによるアンケート調査を行った。調査項目として，化粧入念度を素顔・化粧入念度低程度・化粧入念度高程度の 3 条件に分類し，それぞれの化粧入念度場面における感情状態を，小川(2000)の一般感情尺度を用いて測定した。一般感情尺度の下位尺度得点(肯定的感情・否定的感情・安静感情)を従属変数，化粧入念度(素顔・低程度・高程度)を要因とした一要因分散分析を性別ごとに行った。また，各化粧入念度で使用した化粧品目を回答するよう求め，感情変化と使用された化粧品目の関連を対応分析によって検討した。

結果・考察

化粧入念度の違いによって喚起される感情の程度がどのように異なるのかを検討するために，一要因分散分析を行った。その結果，男女問わず，化粧入念度が高まるにつれて，肯定的感情は増加し，安静的感情は低下することが明らかとなった。このことから性別によって化粧行程は異なるが，化粧が持つ心理的効果は男女問わず発揮されることも示唆された。また，女性の素顔条件と化粧入念度高程度条件の間においてのみ，否定的感情との有意差が認められたことから，女性の特性的な自意識の高さ(菅原，1984)が関係したことが考えられる。さらに，各化粧品目と感情変化の関連については，化粧入念度によって感情変化に影響を与える化粧品目に違いがあることが明らかとなった。化粧入念度低程度と高程度で重視する観点が異なっていたため，入念度ごとに感情変化をもたらす化粧品目に違いがみられたことが考えられる。

大学生の優柔不断に関する要因の検討
―養育態度と自尊感情の観点から―

問題と目的

本研究は，大学生における優柔不断という意思決定の遅延や回避の要因を明らかにするため，幼少期の親の養育態度（受容的，統制的，責任回避的）と現在の自尊感情が，優柔不断にどのように影響するかを検証することを目的とした。先行研究では，延引行動が親の養育態度や自尊感情と関連することが示唆されているものの，優柔不断という包括的な概念については，心理学的な研究が不足していた。本研究では，優柔不断を「熟慮」「先延ばし」「他者参照」「不安」の 4 因子から構成される特性として捉え，これらの特性に対する養育態度と自尊感情の影響を明らかにすることを試みた。

方法

Google フォームを利用した質問紙調査を行い，大学 1 年生から 4 年生までの計 121 名（男性 32 名，女性 89 名）の回答を対象に分析を行った。質問紙の内容は，（１）優柔不断尺度（斎藤・緑川，2016）16 項目，（２）認知された親の養育態度尺度（鈴木他，1985）の尺度を基に，龍・小川内（2013）が作成した 21 項目，自尊感情尺度（Rosenberg，1965）が作成し，山本他（1982）が邦訳した全 10 項目で構成された。

結果と考察

因子分析の結果，優柔不断尺度は「不安」「先延ばし」「熟慮」「他者参照」の 4 因子で構成され，認知された養育態度尺度は「受容的・子ども中心的かかわり」「統制的かかわり」「責任回避的かかわり」の 3 因子で構成された。相関分析を行ったところ，優柔不断の「不安」は，受容的・子ども中心的かかわり，自尊感情と負の相関，統制的かかわりと正の相関が，「先延ばし」は，統制的かかわりと正の相関，自尊感情と負の相関が，「熟慮」は，自尊感情と負の相関が，「他者参照」は，受容的・子ども中心的かかわり，自尊感情と負の相関，統制的かかわりと正の相関があった。その後重回帰分析を繰り返して行う簡便法パス解析を行ったところ，受容的な養育態度は自尊感情を高め，その結果，優柔不断特性（熟慮，先延ばし，他者参照，不安）を低下させることが示された。一方，統制的な養育態度は自尊感情を低下させ，その結果，優柔不断特性（特に，先延ばし，不安）を高めることが明らかになった。また，責任回避的な養育態度は優柔不断特性との直接的な関連は示されなかった。これらの結果から，幼少期の親の養育態度が子どもの自尊感情を介して，優柔不断に影響を与えるというメカニズムが示された。特に，受容的な養育態度は自尊感情を高め，意思決定を促進する一方で，統制的な養育態度は自尊感情を低下させ，優柔不断につながる可能性が示唆された。

励ましをもたらす歌詞の検討

問題と目的

現代は手軽に音楽を聴くことができる時代であり，音楽に関する研究はいくつか行われてきた。その中でも歌詞に焦点をあてた森（2010）は，歌詞は必要不可欠な要素であると考え，歌詞の役割を研究し，「音楽に実際に情動を喚起される反応（e.g. 音楽を聴取して，その音楽によって楽しくなる）」である「情動」に対して影響を及ぼすことを明らかにした。

本研究では，情動のなかでも特に励まされるという情動に焦点をあてて，ネガティブな状態の時に励ましをもたらす歌詞を検討することを目的とした。ポジティブな影響を及ぼす歌詞は個人の経験によって異なると考え，それぞれの経験と実際にポジティブな影響をもたらした歌詞を対応させて研究する。

方法

Google フォームを利用した質問紙調査を行い，19 歳から 48 歳の 104 名（男性 29 名，女性 74 名，回答しない 1 名）の回答を対象に分析を行った。質問紙の内容は，(1) 音楽に励まされた経験に関する質問 7 項目，(2)「衝撃」,「没入」,「投影」の 3 下位尺度から成る歌詞への共感尺度（森・岩永，2011）15 項目で構成された。

結果と考察

歌詞への共感尺度の確認的因子分析を行い，ネガティブな状態を,「落ち込み」,「つらい」,「不安」,「困難」,「憂うつ」の 5 つのグループに分類した。そして，5 つのネガティブな状態を要因，歌詞への共感尺度の 3 つの下位尺度得点を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果，つらい状態は困難な状態よりも「衝撃」という共感の下位尺度得点が有意に高く，つらい状態は憂うつな状態よりも「投影」という共感の下位尺度得点が有意に高かった。次に，励ましをもたらした歌詞および励まされ方の対応分析を行ったところ，落ち込んだ状態では「ワタシ」「君」という一人称や二人称の語，つらい状態では「もう一度」「頑張る」，不安な状態では「できる」や「諦める」，困難な状態では「行く」や「負ける」，憂うつな状態では「無理」「大丈夫」などの語との対応がみられた。また励まされ方については，それぞれに励ましをもたらした歌詞を素直に受け取って解釈し，状態を変える行動に繋がっていることが明らかとなったが，つらい状態においてのみ,「前向きになれた」という回答が特徴的にみられた。これは，多重比較の結果を踏まえると，歌詞に自分を重ねたり新たな考えに気づいたりすることが励ましをもたらすのだと考えられる。

運動部活動経験を持つ大学生の成長実感獲得過程についての検討
―競技チアリーディングを対象として―

【研究目的】

本研究の目的は、運動部活動経験を持つ大学生の成長実感獲得過程について検討することである。具体的には、１）自分に影響を与えた部活動での経験はどのようなものだったか、２）部活動での経験は、人としてどのような成長をもたらしたと思うか、３）部活動での経験から得た成長を今後どのように活かせそうか、４）一連の経験を現在どのように捉えているか、に関して検討した。

【研究対象者・研究方法】

本研究はインタビュー調査を用いて行った。インタビュー対象者は、大学生時代に運動部活動を引退まで続け、かつ引退を迎えてから４年以内の者とした。種目は競技チアリーディングを対象とし、全国大会で優勝経験のない者とした。

【分析結果・考察】

当事者の語りから、１）部活動において何らかの危機に直面するも、努力して乗り越えて引退までやり遂げた対象者が、２）自信を獲得して肯定的な変容を遂げることによって、３）自身の成長を実感していることが明らかになった。そして、４）就職活動や働く場面において自身の成長を認知するとともに、部活動によって大学生活が充実したと考えていることが明らかとなった。

先行研究と同様に、部活動における危機を乗り越えた経験から成長を見出すことができたことに加え、本研究では、先行研究で明らかにされていなかった各対象者の困難を乗り越えていくプロセス及び肯定的に変容を遂げていく様子が明らかになった。そして、競技チアリーディングの競技特性である「元気」、「笑顔」、「チームワーク」などが就職活動や職場を含めた対人場面において活きていることも明らかになった。